


認知症ケアのリスクマネジメント

認知症におけるリスク管理

1 認知症ケアの現場に多い事故・トラブルとは

1) 認知症による事故・トラブルの具体例

**転倒
転落**



平衡感覚が不安定
身体のバランスを崩しやすい
薬の副作用で「ふらつき」

歩行が困難になり、認知症が進行してしまうケースも

嚥下反射の衰えによる**誤嚥事故**などにも注意

1 認知症ケアの現場に多い事故・トラブルとは

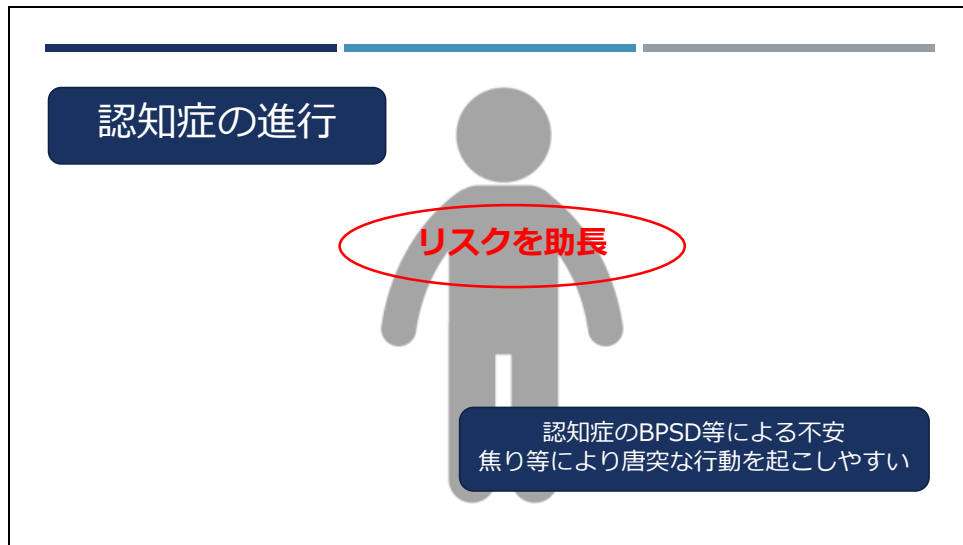
1) 認知症による事故・トラブルの具体例

介護現場において最も注意しなければならない事故といえば、転倒転落それに伴う骨折です。

特に認知症の人の場合、平衡感覚が不安定になり、身体のバランスを崩し、薬の副作用で「ふらつき」などで転倒しやすくなることも多々あります。

骨がもろくなりがちな高齢の方にとっては、転倒は高確率で骨折を招いてしまいます。最悪な場合、歩行が困難になり、認知症が進行してしまうケースもあります。

様々な神経系への影響という意味では、嚥下反射の衰えによる誤嚥事故などにも注意が必要です。



また、注意したいのは、見当識の衰えから来る事故です。

例えば、「自分の身体機能」が十分に認識できず、本当は自力歩行ができないのに、介助をつけず突然歩き出し、そのまま転倒するというケースもあります。

他にも「空間」への認識機能が弱まるゆえに、段差などが把握できず「つまずき」などのケースもあります。とくに、認知症の人の場合、不安や混乱の心理に陥りやすいため、「とっさの行動」をとりやすい傾向があるようです。


身体機能や空間への認識が十分に働かないと、転倒転落などの事故につながってしまうわけです。

①認知症の人によくある転倒ケース

体の向きを変えようとして転ぶ
後ろから急に呼ばれると、振り向きざまに転倒してしまうことがある
呼びかけるときは、そばに行って前に回り込んでから声をかけるようにする
右利きの人に左後ろから声を掛けると、振り返ろうとして足がもつれ、転倒の原因になることがある

動く引き戸に寄り掛かる
引き戸に寄り掛かって転倒する
居室の扉等、引き戸を採用していることが多い

靴が上手く履けない（かかとを踏んでしまい転倒）
紐靴は履かない、歩きやすい靴にする
中敷きを入れる



①認知症の人によくある転倒ケース

体の向きを変えようとして転ぶ

後ろから急に呼ばれると、振り向きざまに転倒してしまうことがあります。そのため、認知症の人に呼びかけるときは、そばに行って前に回り込んでから声をかけるようにしましょう。

また、右利きの人に左後ろから声を掛けると、振り返ろうとして足がもつれ、転倒の原因になることがあるので注意が必要です。

動く引き戸に寄り掛かる

戸が引き戸になっていると、寄り掛かって転倒するケースがあります。介護施設では、居室の扉等、引き戸を採用していることが多いので、戸のレールに金具を嵌め込んで動かないようにし、入口には暖簾を掛けている部屋も結構ありました。

レールに嵌め込む金具は、ホームセンター等で売っているのですぐに出来る転倒予防だと思います。

靴が上手く履けない（かかとを踏んでしまい転倒）

これは、靴を工夫すれば防げます。紐靴は履かないこと、歩きやすい靴にすることはもちろんですが、サイズがぴったり合っていて、幅も合っているものを購入すると良いでしょう。今はいい介護用シューズが出ているので、かかとを自分で入れなくても、足を入れれば自然とかかたが起き上がってくるものもあります。


また、今まで履いていた靴でも、100円ショップ等で中敷きを購入して入れるだけで、底上げになり脱ぎ履きがしやすくなる場合もあります。

睡眠薬が効かず、寝ぼけてふらつく
睡眠導入剤を飲んでいる場合、薬が抜けきらず、呆然としたままトイレに行こうとして転倒
ベッドから立ち上がった位置に椅子を置くことで、掴まる場所を確保するという方法もある

夜ベッドから降りようとして失敗
ベッドの高さが使用者に合っているか確認してみる
座った状態で床に両足の裏がしっかり着いている状態がベスト
介護用ベッドであればサイドレールを付け、掴まる場所を作っておく

とっさの行動

徘徊
他者への暴力
妄想
幻覚
錯覚



睡眠薬が効かず、寝ぼけてふらつく

夜は明かりも少ないので、転倒のリスクは上がります。高齢者の場合、夜中トイレに行こうとして足元が見えず転倒してしまったり、睡眠導入剤を飲んでいる場合、薬が抜けきらずに、呆然としたままトイレに行こうとして転倒してしまうこともあります。

こうした場合、足元灯を付けたり、ベッドとトイレの動線をなるべく短くするように家具の配置を変えてみるのも有効です。また、ベッドから立ち上がった位置に椅子を置くことで、掴まる場所を確保するという方法もあります。

夜ベッドから降りようとして失敗

このケースは、まずベッドの高さが使用者に合っているか確認してみてください。座った状態で床に両足の裏がしっかり着いている状態がベストです。また、介護用ベッドであればサイドレールを付け、掴まる場所を作っておくのもいいと思います。

「とっさの行動」から起こりえるトラブルは、徘徊や他者への暴力、・妄想、・幻覚と錯覚などの行動が見られます。

グループホームなどでは、他の利用者の居室へと入って行って、そこで当事者同士がトラブルになる光景も見られます。こうしたトラブルの多くは、周囲からは「突飛な行動」に見えても、本人にとっては何らかの理由が背景にあったります。

例えば、「徘徊」についても、本人の心理上では「私の家は別にある」とか「私がここにいる理由が分からない」という認識から外に出て行ってしまいうけです。つまり、自分が認識している世界と現実の世界との間にズレが生じ、それを何とか埋めようとする行動がトラブルにつながるといえます。